

January 2013

京都大学総合博物館 ニュースレター



マリア十五玄義図 透過光写真（部分）

| | |
|---------------------------------|----|
| 特別展「マリア十五玄義図の探究 —三つのマリア像—」 | 2 |
| 特別展「ウフィツィ・ヴァーチャル・ミュージアム」 | 3 |
| 企画展「陸上脊椎動物の多様性と進化 —京都大学の挑戦—」を開催 | 3 |
| 学生企画ワークショップ「動物を仲間分けしよう！」報告レポート | 4 |
| 陸上脊椎動物に関する国際シンポジウムを開催 | 7 |
| 特別展「大学は宝箱！」と今後の京都・大学ミュージアム連携 | 8 |
| 特別展「クニマスと共に —過去から未来へ—」 | 10 |
| 総合博物館日誌 H24.4 ~ 12 | 12 |

特別展

「マリア十五玄義図の探究 ― 三つのマリア像 ―」

開催期間：
平成25年1月9日～2月3日

「マリア十五玄義図の探究」と題する展覧会は、昨年、国立歴史民俗博物館（歴博）で開催された。今回は、その第二弾である。

「マリア十五玄義図」をめぐる歴博とのおつきあいは1996年にさかのぼる。この年、京都大学は歴博と共同で、総合博物館（当時は文学部博物館）所蔵の「マリア十五玄義図」に対し、初の科学的分析を実施した。合同展は、その研究で残された膨大な写真資料のアーカイブ化に着手したことをきっかけに計画が進み、実現したものである。

今回の展覧会の見所は三つある。一つ目は、写真資料のアーカイブが初めて公開されること。「京都大学総合博物館蔵キリシタン関係資料」という名のコレクションには、共同研究が生み出した写真群の他に、大正期に京都帝国大学の新村出や濱田耕作の残したガラス乾板写真、2004年の「マリア十五玄義図」修復時の記録写真が含まれる。「マリア十五玄義図」のいわばすべてを伝えるコレクションである。

二つ目の見所は、茨木市で見つかった二つの「マリア十五玄義図」の原本を、同じ空間で見られることだ。別々の村にひっそりと伝えられてきた「マリア十五玄義図」が対面する、初めての機会を用意できたことは、担当者として望外の喜びである。

三つ目は、平成になって制作された復元模写を、制作過程も含め鑑賞できることである。緻密な検証の上に作り上げられた模写は、失われた歴史を再現することがいかに困難な作業であるかを教えてくれるだろう。

同じ時期、阪急南茨木駅近くの茨木市立文化財資料館と千提寺のキリシタン遺物史料館では、「世界に羽ばたくキリシタン遺物」と題する展覧会を開催中である。大正期に数多くのキリシタン遺物が見つかった千提寺は、新名神高速道路の予定地となり、景観が大きく変わろうとしている。三館連携でスタンプラリーを実施している。一人でも多くの方がキリシタン遺物に触れ、また、往時の雰囲気伝える今のうちに千提寺を訪れていただければと願っている。

（京都大学総合博物館 教授 岩崎奈緒子）



発見された頃の「マリア十五玄義図」

特別展

ウフィツィ・ヴァーチャル・ミュージアム

開催期間：

平成25年1月16日～3月17日

イタリア・フィレンツェのウフィツィ美術館所蔵の傑作をデジタル技術によって再現した展覧会である。当館では、2011年12月～2012年2月、ジョルジョ・ヴァザーリ生誕500周年記念特別展を開催し、美術史家・建築家として有名なヴァザーリが設計したウフィツィ美術館の建物を模型やパネルで紹介した。そのとき生まれたイタリア文化会館大阪と京都大学の人間・環境学研究科、そして総合博物館との絆が縁となり、今回の特別展が実現した。

超高精細デジタル画像は、最先端技術をもつ日立製作所がフィレンツェ美術館特別監督局の公認・監修の下で制作、作品によっては100億画素を超える情報量があり、迫真の再現力を持つ。展示のメインはボッティチェリ作「ヴィーナスの誕生」をはじめ、ウフィツィ美術館所蔵の名画の実物大レプリカ10点である。また、タッチパネルでは、これらの絵画について、自分の興味のある部分を選んで拡大表示鑑賞できる。絵画の美しさ、画家の技法だけでなく、イタリアの優れた修復技術の痕跡も観察でき、文化財保存学的観点からも楽しめる。デジタルシアターでは名画の解説映像などもご覧いただける。

当館では、これまでも美学に関連する展示をいくつも開催してきた。2004年のフランスを代表する哲学者・評論家ロラン・バルトのデッサン展では、開会式の挨拶で当時の尾池和夫総長が、「バルトは、以前から閉塞状況にあった人文科学にあたらしい視点をもたらしたことで、いわば知の変革を引き起こした人物です。」と述べ、さらに「現代の揺れ動く国内外の情勢の中で、真に未来を志向する学問とはどうあるべきかが問われている」と続けている。

ウフィツィ・ヴァーチャル・ミュージアム展は、イタリアの伝統、日本の革新技術、そして日本の教養智のルーツともいべき第三高等学校の精神を継承発展させた人間・環境学研究科の成果の融合によって実現した。歴史・芸術・最先端技術、そしてそれらを融合して未来につなぐ教養智、今回の展示はいま大学に問われている「リベラル・アーツとはなにか」という問いを考えるに当たって大きな示唆を与えるものと確信する。是非ともご観覧いただきたい。

(京都大学総合博物館 館長 大野照文)

企画展

「陸上脊椎動物の多様性と進化 — 京都大学の挑戦 —」を開催

平成24年6月6日から10月14日まで、企画展「陸上脊椎動物の多様性と進化—京都大学の挑戦—」を開催しました。京都大学は、哺乳類、爬虫類、両生類が含まれる陸上脊椎動物の多様性や進化の研究の長い歴史をもち、現在も世界をリードする研究を行っています。企画展では、京都大学で記載された新種を写真で紹介するとともに、京都の陸上脊椎動物、ヤマカガシの毒の進化、哺乳類の形態進化と多様性、マダガスカルでの多様性と適応放散、東南アジアでの種多様性、東アジアにおける種多様性進化という、京都大学が現在精力的に行っている研究テーマを取り上げました。京都大学の研究の特色として、フィールドワークと国際共同研究があげられます。この企画展では、大学院生や若手研究者によるミニレクチャーと展示解説をおこない、フィールドワークがどのように行われているのかについても伝えることができたとと思います。夏休み期間中は、子

どもたちに身近な脊椎動物を通じて生物多様性の重要性について考える機会となったようです。また、会期中に総合博物館が関わる2つの国際シンポジウムが開催されました。パネルの英訳を準備して、海外の研究者にも見てもらい、今後の国際共同研究の発展にもつながりました。

(京都大学総合博物館 准教授 本川雅治)



学生企画ワークショップ 「動物を仲間分けしよう！」報告レポート

1. はじめに ー実施の経緯ー

このワークショップ（以下WS）は、平成24年度前期に実施された京都大学全学共通科目「博物館教育論」の授業の中で私たち受講学生が企画したものである。「博物館教育論」は京都大学総合博物館の大野照文先生が担当された授業で、博物館で起こる『学び』とその実情について、時折WS実践を交えながら私たちは多角的に学習することができた。この授業の最後に、現在行われている企画展「陸上脊椎動物の多様性と進化」を来館者により楽しんでもらう学習ツールを作成するというグループ課題が出され、私たちはWSの作成と授業における発表を行った。前期授業終了後、自分たちが作成したWSを実際の来館者を対象に実践してみたいという声上がり、博物館の協力のもと今回のWSの実現に至った。

2. WSの概要

「動物を仲間分けしよう！」というテーマで行ったWSは、子どもたちに企画展で展示されている動物たちを自分たちで論理的に考えて分類することで、分類学の楽しさを体験してもらいたいという目的のもと、京都大学総合博物館の企画展関連WSとして実施した。WSの内容は、動物カード（表は動物の写真、裏は頭蓋骨の写真）を用いた動物の仲間分けゲームで、子供たちによる観察と話し合いを通して、11種類の動物を4種類のグループ（げっ歯目、食肉目、偶蹄目、霊長目）に仲間分けしていくものである。チームに分けによるアイスブレイクの後、動物の見た目、食べ物、歯の形状の違い、という3つの観点から、子供たちに動物の仲間分けを行ってもらい、その後、展示室にて4種類の動物の骨の特徴について解説を加えながら再び観察していく、という流れで行った。（詳しくは図1を参照いただきたい）

3. WSのねらい

では、今回行ったWSのねらいについて具体的に挙げていきたい。本WSのねらいは、主に次の3点に集約される。

- ①企画展示について、楽しみながら学ぶ
- ②課題探求能力、問題解決能力（博物館でのリテラシー）を涵養する

- ③“観察、推理、議論、確かめ”というプロセスにより、学問的探求の面白さを知ってもらう

①については、グループで展示見学を行った際、「展示内容が大人向けのため、子どもは興味を持ちにくいのではないか」、「動物の骨のみしか展示されていないため、その骨がどんな動物のものなのか想像し難いのではないか」、「展示されている動物どうしの関係が分かり難いのではないか」という意見が出た。これらの意見をもとに、“子どもたちに企画展を楽しんでもらう”、“動物に対して興味を持ちながら学んでもらう”ということを目的とし、動物カードを用いたゲーム形式のWSを企画することに決定した。

②については、見た目、食べ物、骨という3つの観点でくり返し動物を分類していくことで、多角的な視点からモノを見ること、疑問を持ち考えることを体感できると思い、WSの内容を考えた。これは課題探求、問題解決の能力の向上につながり、この展示をみることだけに留まらない、博物館において主体的にモノと関わっていける、リテラシーを涵養することにつながるのではないかと考える。

③については、自分たちの手で動物を仲間分けしていくことにより、これまで主に研究者が行ってきた、生物の“分類”の追体験を行うことを可能にする。さらに「なぜこの仲間分けにしたのか」ということを考え、グループ同士で意見交換することで、探求していくことの楽しさ・面白さを感じることが出来る。また、グループ対抗戦という形を取り、相手チームに自分たちが行った分類の理由を説明する時間を設けることで、根拠に基づいた言葉で伝えること、相手に納得してもらうことの重要性を体験できると考えられる。

4. WSの実践

当日の様子

WSは、2012年9月1日（土）、13時～14時、14時半～15時半の2回、各回1時間ずつで実施した。参加対象は小中学生としていたが、参加者は各回とも全員小学生で、1回目に6名（男子2名、女子4名）、2回目に5名（男子5名）という内訳となった。各回とも参加者を2つのグループにわけ、チーム対抗戦という形でカードゲームを進行した。WSの進行

にあたっては、司会・ファシリテーターに1名、現場サポートと展示室での解説に1名（2回目は2名）というスタッフの配陣で行った。また当日は1階ロビーで週末子ども博物館が開催されており、そこでスタッフをしていた大学院生の方たちも子どもたちに混じってWSに参加してもらえたため、子どもと大人と一緒にワークしていくとても活発な場となった。

WSの実践経験の少ない私たちにとっては、子供たちが実際どのような反応をするのか未知であり不安も大きかったが、参加してくれた子どもたちは終始元気に楽しそうにワークに取り組んでおり、観察や話し合いも非常に活発に生まれていた。私たちスタッフの仕切りのテンポやファシリテーション技術など、反省する点や磨きたい点は多々あったが、子供たちがワクワクしながら動物を仲間分けしている様子を見て、本当に楽しくWSを行うことができた。

仲間分けの途中、「歩き方の違いについても考えられそう！」という意見が出ており、新たな分類の観点が子どもたちのなかで生まれていた。多角的な視点から動物を観察していくことで、主体的に探求していく姿勢が生じたということが言えそう。また、「動物の見た目」「食べ物」「歯の違い」という観点が段々と加わっていくことで、子どもたちはその都度グループ内で活発なコミュニケーションを行いながら推理を練り直し、「食べているものが違うけど歯は似ている」「僕たちと同じで何でも食べるから、見た目は違うけど、こっちじゃない？」というように、多角的な視点から複合的に思考し、根拠を固めていた。これらのことから、今回行った3段階の思考ステップは、動物について様々な角度から観察して考えていくことをうまく誘発するとともに、モノと対峙することでの柔軟な思考方法、探求能力を養うことにおいて、非常に有効であったと考えられる。このように、実践においてWSのねらいが達成されることが明らかになった。

アンケート結果の考察

つぎに、WS終了後に答えてもらったアンケート結果（表1）を簡単にふりかえっていきたい。

【1、今日のイベント「動物を仲間分けしてみよう！」はどうでしたか？】の質問には、全員が「とても楽しかった」「楽しかった」と回答しており、本WSのねらいで示した「①企画展示について、楽

しみながら学ぶ」は、ほぼ達成されたと言える。続いて、【2、以前から動物に興味がありましたか？】の質問には、「以前から興味はあった」と答えた人が8人、「どちらとも言えない」「あまり興味はなかった」と答えた人がそれぞれ1人であったが、【3、今日のイベントで動物への興味が増えましたか？】の質問には、全員が「前よりも動物への興味が増えた」と答えていた。このWSの1つの成果として、子どもたちの動物への興味向上ということが言えそう。

また自由記述の感想欄には、「仲間わけをするのが楽しかった」「動物カードで、うらの骨を見て、歯にも興味を持ってました。今度は、は虫類、両生類などのことをしてほしい」という回答があり、WSに参加することで、動物や分類することに対する関心がさらに高まったことが分かる。この関心が今後継続的に次の活動に繋がるかどうかまでは分からないが、WSのねらいで挙げていた動物や探求への関心や興味のきっかけを引き出すことができたと思われる。

反省点

さいごに今回のワークショップでの反省として、広報と記録についての反省を述べたい。まず広報に関しては、立案から実施までの日が短く、ワークショップ参加者の募集案内を、博物館の受付と博物館HP掲載という限られた場所でしか行えなかった。WS参加予約の人数も少なかったため、当日博物館に来ていた子どもたちに直接声かけを行い参加してもらったケースもあった。つまり今回WSに参加してくれた子どもたちは、少なからず博物館に興味がある子どもたちばかりだったということだ。広報していく際には、博物館が有する近隣の小学校へのネットワークを生かすなど、幅広いターゲットに向けた告知と募集を行える工夫をする必要があったと反省している。

次に記録に関しては、当日の様子を一切記録（映像、写真、音声などにおいて）することなく終えてしまった。（現場に訪れた大野先生により、現場の様子は写真で数枚残っていた。）本WSは博物館における教育活動であるが、そこで起こる学びの内実は、WSの設計シナリオとアンケートとスタッフの感想だけで語れるものでは決してない。当日参加した子どもたちの表情や目線、一人一人の発話、グループ内で起こる議論、ファシリテーターの言動やふるまい、私たちを含めた参加者同士のコミュニ

ケーションと子どもたちに起こった変化など、現場で生じるさまざまな事象が、モノと人、人と人との関係とそこで起こった学びを語るための研究資源でもあったのだ。今回私たちには、現場で生成したコミュニケーション、発見、学びを、どのように振り返り分析していくのかといった視点が欠けており、目先の子どもの反応とWSを楽しむということのみに視野が狭まってしまっていた。次につなげていく活動を続けるためにも、教育的視点での博物館での学びの分析を深めていくためにも、記録するということが今後は大事にしていきたい。

5. おわりに ー今後に向けてー

今回WSを行い、子どもたちの反応を実際に見ていくことで、「博物館で起こる学び」と一口に言っても、そこで生じている発見や疑問は本当に多様であることを実感することができた。様々な背景と鋭い観察眼と好奇心を持った来館者と一緒に何ができるのか、可能性は非常にたくさんあると感じる。何

よりこのWSの企画・実践を行うことで、「博物館教育論」の受講生であり一来館者でもある私たちは、博物館を独自に活用し、資料と来館者、スタッフとの交流を通して、極めて多くのことを学ぶことができた。このような多方向からの関わりが、博物館の可能性をより豊かに広げていくことになるのではないかと思う。この授業をきっかけに生まれた博物館との関係を今後も繋げていきたい。

最後になりましたが、大野先生をはじめワークショップの実践にご協力いただいた博物館関係者の皆様、授業内でWSを一緒に作り上げた「博物館教育論E班」のメンバーにこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

(京都大学文学部 吉田 守伸)
 (京都大学文学部 中嶋 瑞希)
 (京都大学大学院理学研究科 住吉 昌直)
 (京都大学大学院教育学研究科 渡川 智子)

図1：WSの流れ

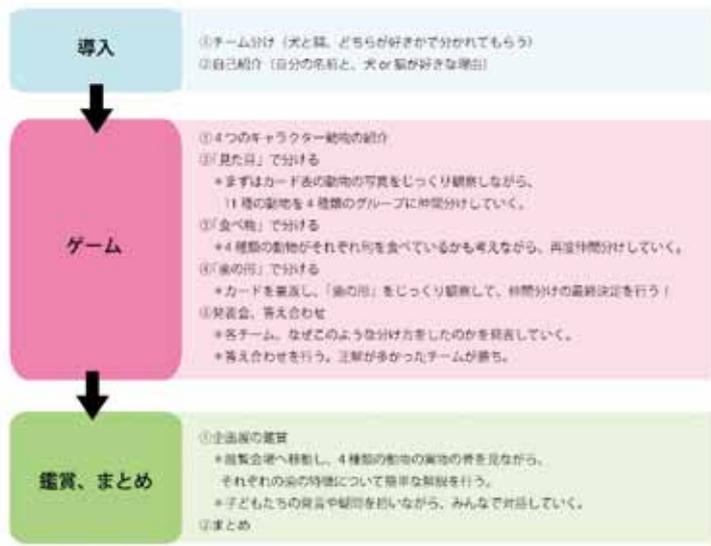
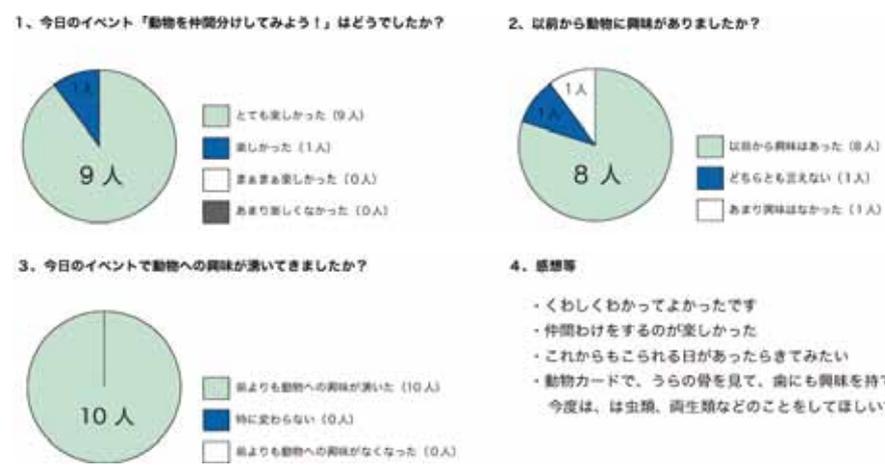


表1：アンケート集計

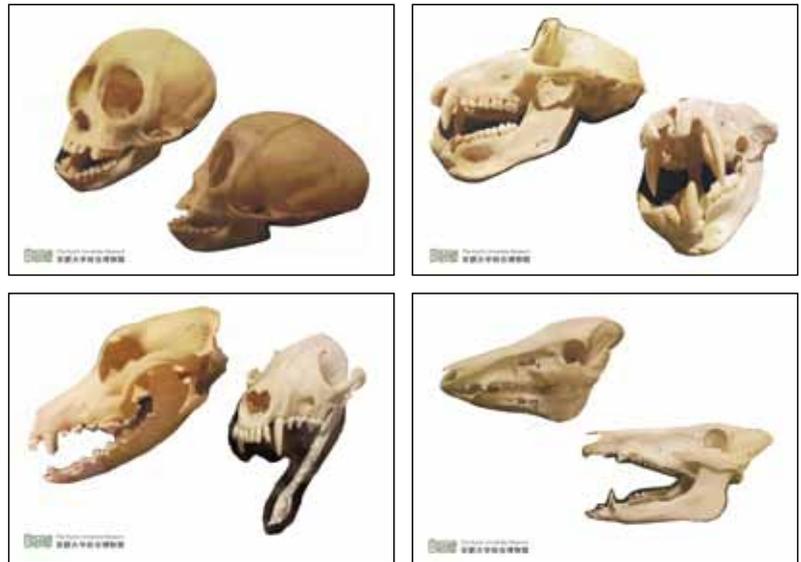
※アンケート回答者11名のうち、回答不明1名をのぞいた10名を集計対象とする



参考資料



WS告知用のチラシ



WS使用カード 裏面（表面は動物の写真） 大きさはA5サイズ（1グループ11枚ずつ）

陸上脊椎動物に関する国際シンポジウムを開催

平成24年7月27日から29日にかけて、総合博物館が第2回東アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウムを開催しました。これは総合博物館が拠点機関として進める日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業「東アジア脊椎動物種多様性研究基盤と標本ネットワーク形成」の一環として行われ、昨年中国の広州大学で共同開催した第1回目に続くものです。日本、韓国、中国、台湾、ベトナムから80名の研究者が参加、59の研究発表がなされ、活発な議論と学術交流が展開されました。東アジアの陸上脊椎動物の種多様性を進めるために、国境を越えた国際共同研究の推進やフィールドワークの共同実施、情報の共有、研究の基盤となる標本のネットワーク形成などを目指しました。

また、シンポジウムに先立つ7月16日～26日にかけて、日本、韓国、中国、ベトナムの9名の若手研究者が研究トレーニングを行いました。陸上脊椎動物の種多様性理解にはフィールド調査が重要です。18日から23日にかけて長野県伊那市の信州大学農学部附属AFCセンター西駒ステーションの標高800～2600メートルで調査を行い、哺乳類9種、爬虫類3種、両生類9種を確認しました。

その後は、調査データのとりまとめや標本のより詳しい解析を行い、成果を27日の国際シンポジウムで紹介しました。こうした活動に示されるように、総合博物館は、東アジアの陸上脊椎動物研究の国際拠点として重要な役割を担っています。

（京都大学総合博物館 准教授 本川雅治）



国際シンポジウム参加者



若手研究者トレーニング

特別展

「大学は宝箱！」と今後の京都・大学ミュージアム連携

2012年10月3日から11月25日まで京都大学総合博物館において開催した京都・大学ミュージアム連携合同展覧会「大学は宝箱！—京の大学ミュージアム収蔵品展—」は、京都市内外から総計9000人をこえる来場者を迎え、大変好評のうちに幕を閉じた。



昨年9月、2011年度文化庁助成「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」を受けた京都市の事業「京都のミュージアム活性化プロジェクト」が採択され、「京都・大学ミュージアム連携が発足した。大学ミュージアムの関係者たちに参画をよびかけ、12月には14館の大学ミュージアムが集まった。翌年2月に、初めての事業となるシンポジウム「いま、大学ミュージアムに求められるもの」をおこない、その後参加希望のあった1館を加え、連携ミュージアムは15館となった。

ミュージアム連携は、「大学のまち・京都」には、じつは「大学ミュージアムのまち」といってよいほどに多くの大学ミュージアムがあり、その収蔵品は、京都の立派な文化遺産であるにもかかわらず、あまり一般に認識されていないという点が発点になっている。こうした現状を踏まえ、大学ミュージアムが連携することにより、収蔵品を有効に利用し、ひろく一般の方々にその意義と意味、さらには大学の歴史や教育・研究とのかかわりを知ってもらうことはできないかと考えた。

さて、シンポジウムで大学ミュージアムの可能性を提示した私たちは、今年度その真価をもっと分かりやすいかたちで皆様に披露したいと考えていた。あっと驚くようなイベント。連携ミュージアム15館による合同展覧会の開催である。

3月、合同展覧会に向けて各館の代表者らによる実行委員会を立ち上げた。出そろったメンバーは、館長から学芸員、教授からポストドクまで立場はさまざま。各館がどのようなコレクションをもっているのかさえ、ほとんど分からないなか展覧会の構想が始まった。

幹事校の司会で議論がすすんだ第一回目の実行委

員会。ひとつどうしても譲れないコンセプトがあった。どんな作品が集まってこようと、ひとつの展覧会として統一感を出したい。合同展覧会だからといって寄せ集めの展覧会にはしたくなかった。そこで私たちは、極めて多彩であることが分かってきた15の大学ミュージアムのコレクションに、「京都」という重要かつシンプルな共通テーマを与えた。これを大きな柱として、さまざまなキーワードに、各館の作品をあてはめていく作業が始まった。最終的に決まったサブテーマは、「京都の姿」「祈る」「記す」「創る」「暮らし」、そして、各館一押しの作品を並べる「大学の宝物」。各テーマのキュレーション担当者を決め、さらに担当者による詳細な打ち合わせを経て、6月、出品作品がでそろった。4期にわたる展示替えも含めてのべ169点。仏像からミイラ、絵巻からポスターまで、京都から世界へ、世界から京都へ、さらに人びとの日常へと視点を移しながら、さまざまな作品を楽しんでもらえる展覧会、「大学は宝箱！」展が誕生した。

もちろん、すべてが順調にすすんだわけではない。各館における学芸員の権限の問題、人員不足の問題、さらには、作品の



移動、展示といった金銭的な問題に付随する責任の所在の問題など、大学ミュージアムの弱点が徐々に表れてきた。足並みがなかなかそろわず、立ち往生することもしばしばあった。それでも各ミュージアムの担当者らの懸命な努力で、なんとか着地点をみつめることができた。

7月末、「大学は宝箱！」展にふさわしいにぎやかなポスターができあがり、広報活動が始まると、多くの方面で反響があった。新聞各社の取材、ラジオへの関係者の出演、実現しなかったがテレビ局によるドキュメンタリー映像作成の話ももちあがった。いくつかの企業には協賛をいただき、予算内ではとても実現できなかった電子図録や1階ホールを飾る大きな垂れ幕を用意することができた。9月末の集荷・展示作業では、各館の担当者らが忙しいなか時間を調整して集合し、展示業者の手をかりず約3日間で会場を作り上げた。怒涛の3日間であった。



また、学生の参加も忘れてはならない。展示・撤収作業には連携大学の学生が多く参加し、そのなかで

学生どうしの交流も生まれた。毎週土曜日には学生による展示解説を実施し、また、京都大学総合博物館の《子ども博物館》とタイアップした《子ども博物館+》では、連携大学の学生が合同展覧会の作品をつかってそれぞれオリジナルのクイズラリーを考えた。連携のロゴや合同展覧会のチラシ・ポスター・カタログ、キャプションやパネルのデザインもすべて、教員による指導のもとで作り上げられた学生たちの作品である。

こうして10月3日、無事開幕の日を迎えた合同展覧会は、美術館・大学関係者をはじめ多くの方々から、「興味深い試みであった」「大学ミュージアムがこんなに魅力的であるとは知らなかった」と暖かいお声をいただいた。ややもすると近づきたい大学ミュージアムの敷居を少し下げることができたかもしれない。また、学生の入場者率が高かったことも大学ミュージアムにとって嬉しいニュースであった。多くの大学ミュージアムが自校の学生が展覧会を見に来てくれないという悩みを抱えている。学生たちが大学ミュージアムの多彩さに驚き、興味をもってくれたことは、大きな成果のひとつである。

合同展覧会にさきがけて始まった、各連携ミュージアムをめぐるスタンプラリーも展覧会を盛り上げるのに一役買ってくれた。当初、この企画にどれだけの人が興味をもってくださるのかと不安で、達成者はせいぜい15~20名だろう、とふんでいた私たちの予想はみごと裏切られ、70名をこえる達成者が出るという想定外の喜ばしい事態となっている。しかし、この企画にあたって、各ミュージアムのおかれた状況の違いが壁となった。入場料の有無、景品用のグッズの有無、スタンプ管理の問題。開館期間の短さから参加を見送ろうとする館もあった。それでもこれほど多くの皆様が京都・大学ミュージアム連携の取り組みに期待をもって下さっていることは、大きな支えである。

つい先日撤収作業を終え、余韻のさめやらぬなか、すでに来年度の事業構想はすすんでいる。今年のような大規模な展覧会は難しいかもしれないが、数館による展覧会やスタンプラリーを実現できれば

と考えている。また、連携館で協定を結び、相互の作品貸借、展示協力、合同企画などのハードルを下げるができないか模索中である。ミュージアムを仲立ちとした学生交流がうまれば、学芸員資格科目をはじめとする教育面での連携も不可能ではない。京都・大学ミュージアム連携のHPも、広報ツールとしてうまく活用していきたいと考えている。

7月の大学博物館等協議会で、私は、連携事業に取り組むなかで誰がどのようにリーダーとなり、責任を取るのか、あるいは、共同責任が可能なのかという問題が顕在化し、その時々でどのような判断をするのか、つまり、進むのか、留まるのか、あるいは名誉ある撤退をするのか、判断とタイミングが難しいというような発言をした。この問題の根本的な解決はしていないが、ある程度リーダーが責任をとる覚悟を決めれば、自然と協力体制ができてくる。当初消極的であった実行委員会も、会議や展示作業で何度も顔をつき合わせるうち、連帯感が生まれ、どうしてもこの展覧会をあっという間に驚くものにしてやろうという熱気につつまれた。大学ミュージアムの連携は、まずはそこに従事する人と人との連携である。まずはその一步を踏み出した気がしている。

この連携には、まだまだ多くの課題が積みあがっている。しかしそれだけ多くの可能性に満ちていることもたしかである。

今後とも京都・大学ミュージアム連携の活動に熱い期待をお寄せいただきたい。

会場校の京都大学総合博物館をはじめ、各ミュージアムには本当に多くの時間と多くの労力をさいて京都・大学ミュージアム連携の事業を支えていただいた。幹事校としてただただ感謝するばかりである。

(京都工芸繊維大学 教授 並木誠士)



特別展

クニマスと共に — 過去から未来へ —

私たちが田沢湖で絶滅したクニマスが山梨県西湖で命をつないでいることを発見したのは2010年であった。およそ2年が経ち西湖や田沢湖の人たちの協力、また放送関係の人たちの調査でクニマスについて様々なことがわかってきた。田沢湖ではクニマスは人々の生活にとけこんだ魚であった。そして、現在の西湖ではヒメマス釣りを通して人々の生活と切り離して考えることが出来ない魚になっている。クニマスに関する最新の研究を基礎に西湖での保全と田沢湖への里帰りを目指して、クニマスと人との関わりを過去から未来へ向けて下記のようにコーナー別の展示を行った。

世界中で秋田県田沢湖にしか生息していなかったクニマスは1940年に灌漑と発電のための事業で、強酸性の玉川の水が田沢湖に導入されたことにより姿を消した。田沢湖産クニマス標本は日本と米国に17個体が現存しているが、その中の9個体は京都大学標本であり、川村多實二教授が日本の淡水生物相をあきらかにするために収集したものである。この9個体が西湖での発見に私たちを導いたのである。

戦前の田沢湖クニマス文献 (1907~1925年) : クニマスが生物学的な知見を伴って文献に登場したのは1907年『國鱒人工孵化試験』が最初、写真は1911年『湖沼の研究』が最初である。その後、1915年『秋田県仙北郡田澤湖調査報告』によって、さらに詳しく生態が報告された。そして、1925年米国スタンフォード大学のジョルダン教授によって『Record of fishes obtained by David Starr Jordan in Japan, 1922』でクニマスは新種*Oncorhynchus kawamurae*として記載された。新種記載のホロタイプとなった個体は1922年にジョルダン教授が天津の京都大学臨湖実験所を訪れた際に川村教授から渡された標本であり、現在の京都大学クニマス標本と同じコレクションの中にあつた。



京都大学に所蔵されていた田沢湖のクニマス標本

戦前の田沢湖でのクニマスと人々 (1940年まで) : 田沢湖ではクニマス漁が行われており、網の枚数と場所は漁を行う人の漁業権として所有されていた。漁獲量も記録され、クニマスの資源は管理が行き届いていたのである。これは『ホリ絵図』(仙北市所蔵)『法利加和覚帳』(三浦家文書)に記録として残っている。住民にとって、クニマスは出生祝、誕生日の祝、病氣見舞に持参するものとして欠かせない魚であった。そのことが『出生見舞覚帳』『三浦エツ子三十三歳祝儀諸品別到来控』『病氣御見舞到来覚』(すべて三浦家文書)に記録として残されている。クニマスは田沢湖住民にとって生活の一部であった。

田沢湖での絶滅 (1934~1948年) : 田沢湖を含む雄物川支流玉川水系の豊富な水量を発電と灌漑に利用できないか、という話は戦前のかなり前から出されていた。しかし、玉川の水はpH1.1という強酸性であり、灌漑、漁業、資材の腐蝕についての問題が未解決であったので、この問題は見送られていた。これが1934年の東北地方大凶作を契機として事態が動き始め、漁業補償交渉を経て、1940年1月20日、玉川と先達川の水が田沢湖に導入された。これに際して、魚類学者大島正満博士は『少年科学物語』『魚籠』のなかで、クニマスは生物学上たいへん珍しい生態的特徴をもっており、消えるのは惜しい、といったことを書き記した。これによって、当時多くの人々がクニマスに関心を寄せたのである。戦後になって、1948年東北大学農学部佐藤隆平氏は田沢湖の生物調査を行い、採集を試みたがクニマスは刺網にはかからなかった。この翌年、田沢湖漁業会と日本発送電株式会社の間で漁業補償問題が終わっている。佐藤氏は1948年の調査結果をまとめた1951年の論文の中で「クニマスは著しく減少したか、絶滅に近い状態にあるものと推察される」と記している。これが、事実上のクニマス絶滅宣言に相当すると考えられる。以後、クニマスは忘れられた魚となった。

戦前のクニマス移殖履歴 (西湖、本栖湖、野尻湖、1930~1935年) : 田沢湖畔にはクニマスとヒメマスの孵化場があつた。ここでクニマスは人工授精がされていた。そして、他県に分譲するために1930年1月下旬から3月中旬までに65万粒を採卵したという記録がある。池田辰夫氏所蔵で長野県野尻湖

における1930年の移殖記録があるが、これはクニマスを孵化させ稚魚になった時に放流したことを示す貴重な記録となっている。1935年には山梨県の西湖と本栖湖にそれぞれ10万粒の発眼卵が分譲された。いずれも1935年1月末から2月初めにかけて採卵されて受精された卵であった。

クニマス探しから西湖での発見（1978～2010年）：代々クニマス漁師であった三浦家には西湖と本栖湖へのクニマス卵分譲に関する文書類が保管されている。その当主であった三浦久兵衛氏は最後のクニマス漁師であり、これら西湖と本栖湖の移殖記録文書に着目した。移殖先でクニマスが生存していないか、という強い願いをこめて諸文献を読みノートを作成、クニマスのことを『幻の魚国鱒』という文にまとめ、地元誌（真東風4号）に寄稿したのである。これが国鱒探しの発端となり、田沢湖観光協会は懸賞金をつけて「クニマス探しキャンペーン」を行った。このイベントは1993年に始まり1995年に終わったが、結局クニマスは現れなかった。このキャンペーンの結果を踏まえて、戦前の秋田県水産試験場のクニマスに関する研究や事業報告を掘り起こし、杉山秀樹氏は『クニマス百科』を著した。この著書がクニマスに対する強い興味を中坊にもせたのである。

『クニマス百科』に記されていたクニマスの生態はサケ属のなかで特異であった。黒い深湖魚、クニマスは何者であろう、という思いから、京都大学の田沢湖産クニマスをもとにCGによる復元を考えたのだが、その過程で計らずも本物が山梨県西湖で生存していることを見つけてしまったのである。



2010年西湖で発見されたクニマスの標本

クニマスの正体（2010年以後）：クニマスは「幻の魚」といわれていたほど生物学知見が断片的なものしか残されていなかった。しかし、西湖での発見のあと、西湖漁業協同組合、クニマス研究会、山梨県水産技術センターのご協力をいただき、この魚の姿がはっきりとし、正体が明らかになってきた。クニマスはベニザケの陸封型であるヒメマスと近縁であるといわれてきたが、西湖から得られた多くの標

本の研究結果はそのことを示している。遺伝的に分離した別種にも関わらず若魚期にはヒメマスと外見で区別がつかないこともわかってきた。遺伝子分析を用いなければ判別が出来ないが、その標本も展示した。また、NHKエンタープライズによる生態映像が「ダーウィンが来た」で放映され、すべてではないが産卵期の行動が明らかになった。この映像は会場内で展示したが、クニマスの産卵に関する行動が緩慢であり、敵がない深い湖への適応をうかがわせる。クニマスの生態はサケ属の中で特異な進化を思わせ、興味深いものがある。

クニマスの保全と里帰りの問題（現在から未来へ）：西湖ではヒメマス釣りが行われており、若魚期にはヒメマスに混じってクニマスが釣られていると思われる。ヒメマスとクニマスを釣り分けることは出来ない。そして、西湖の人たちの生活を考えるとヒメマス釣りを続けつつ、クニマスの保全を考えるのが健全であろう。クニマスは西湖の深いところで湧水がある礫場で産卵している。クニマス保全の最も大切なことは産卵場の湧水の地下水脈を断たないようにすることである。西湖は田沢湖に比べてかなり小さい（同一縮尺の地図を、その上に立てる状態で展示）が、現在のところクニマスは遺伝的に純粋な状態では西湖しか判明していない。正しい生物学的知識に基づいて、田沢湖への里帰りを目標においた西湖でのクニマス保全を行わなければならない。西湖での個体数の推定を含めて、今後のクニマス研究の進展が期待される。



展示室の床に描かれた同縮尺の西湖と田沢湖

今回の特別展は山梨県立博物館と共同で行ったものである。展示にあたり、西湖漁業協同組合、クニマス研究会、三浦久氏（田沢湖に生命を育む会）、仙北市、山梨県水産技術センター、富士河口湖町、池田辰夫氏、輿水達司氏、NHKエンタープライズ、国土地理院のご協力をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

（京都大学総合博物館 教授 中坊徹次）

京都大学総合博物館日誌（平成24年4月～平成24年12月）

展示

| 実施日 | 内容・テーマ |
|--------------------------|--|
| 4月25日(水) - 5月20日(日) | 特別展 京大日食展 -コロナ百万度を超えて- |
| 6月6日(水) - 10月14日(日) | 春季企画展 陸上脊椎動物の多様性と進化 -京都大学の挑戦- |
| 10月3日(水) - 11月25日(日) | 特別展 京都・大学ミュージアム連携企画 大学は宝箱! 京の大学ミュージアム収蔵品展 |
| 10月31日(水) - 12月16日(日) | 特別展 クニマスと共に -過去から未来へ- |



レクチャーシリーズ

| 実施日 | 内容・テーマ | 講演者 |
|-----------|-------------------------------------|---------------------------|
| 4月7日(土) | no.100 二枚貝の世界 | 大野 照文(総合博物館長・教授) |
| 5月12日(土) | no.101 金環日食と太陽の謎 | 柴田 一成 (理学研究科附属天文台長・教授) |
| 6月2日(土) | no.102 元素のものがたり | 桜井 弘(京都薬科大学・名誉教授) |
| 7月14日(土) | no.103 遺跡でみつかる木の不思議 | 村上由美子(総合博物館・研究員) |
| 9月15日(土) | no.104 陸の川・海底の川 | 成瀬 元(理学研究科・准教授) |
| 10月6日(土) | no.105 伝統工芸の近代化と戦争 -陶器製手榴弾と友禅図案- | 木立 雅朗(立命館大学文学部・教授) |
| 11月10日(土) | no.106 大学の宝物! | 岩崎奈緒子(総合博物館・教授) |
| 12月8日(土) | no.107 細胞は「力」で会話する | 牧 功一郎(工学研究科・修士) |



総合博物館セミナー

| 実施日 | 内容・テーマ | 講演者 |
|----------------|--|---------------------------|
| 4月13日(金) 第39回 | Sequence of Gigantopithecus faunas, from Chongzuo, Guangxi, South China | 金 昌柱(総合博物館・客員教授) |
| 5月11日(金) 第40回 | 恒星で起こる超巨大フレアの観測的研究 | 前原 裕之 (理学研究科附属天文台・研究員) |
| 6月8日(金) 第41回 | 米国国立公文書館における記録のライフサイクル概念の成立 | 坂口 貴弘(大学図書館・助教) |
| 7月13日(金) 第42回 | 泉鏡花『錦帯記』の創作の背景をさぐる -挿絵、煙草、米西戦争、新聞記事などを手がかりに- | 白方 佳果(総合博物館・研究員) |
| 9月6日(木) 第43回 | Amphibians Biodiversity of Sichuan Basin and Adjacent Areas in History and Now. 四川盆地と周辺地域における両生類生物多様性の過去と現在 | 江 建平(総合博物館・客員教授) |
| 10月12日(金) 第44回 | 歴史的望遠鏡のCG復元と天文学史 | 富田 良雄(理学研究科・助教) |
| 11月2日(金) 第45回 | 魚がなぜ小型・早熟になったのか? | 梁 振林(総合博物館・客員教授) |
| 11月9日(金) 第46回 | 技術と学問 -人文学者がみた湯川記念館史料室所蔵史料- | 田中 希生(立命館大学・非常勤講師) |
| 12月14日(金) 第47回 | 京大地震学の誕生と試練 -小川琢治資料群から見えてきた明治末～昭和初期- | 中西 一郎(理学研究科・教授) |

発行日 2013年1月1日発行

編集・発行 京都大学総合博物館 電話 075-753-3272

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 FAX 075-753-3277

<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/>